

# 世代を超えてサポートする

## —女性ボランティアと学生による結核患者支援

青年海外協力隊(感染症・エイズ対策)

永崎 公志朗

結核は、治療薬や診断技術の進歩がありながら、未だに発展途上国を中心に、多くの国でまん延し、世界的な健康問題となっています。結核撲滅の妨げとなっている要因に、貧困や差別、偏見などの社会的な問題が指摘されており、医療だけでなく、社会的な支援が必要と考えられています。タイ北部のチェンライ県にある結核・エイズリサーチ財団（以下配属先財団）というNGOでは、①結核の研究・事業開発、②人的資源の開発と他機関との技術連携、③慈善事業の三つを柱として、社会的な支援が必要な人への活動を行っています。私は現在、国際協力機構（JICA）のボランティア事業によりこの財団へ青年海外協力隊として派遣され、上記の三つ目の柱である慈善事業に関わってきました。

### タイ・チェンライ県の結核の現状

東南アジアの中でも経済発展著しいタイですが、今なおWHOが定める結核高まん延国22カ国のうちの一つに指定されています。特にタイ北部に位置するチェンライ県は、1990年代にエイズがまん延して以来、結核及びエイズの罹患率が高い地域です。山岳地帯である同県には少数山岳民族も多く、ラオス・ミャンマーとの国境に面していることから多くの移民も暮らしています。人口約120万人の内13%が少数山岳民族、5万人近くがミャンマーからの移民です。この地域の結核治療の社会的な阻害要因として、移民を含む貧困層の割合が高いこと、差別や偏見がコミュニティ内にあることが挙げられます。

貧困層の患者にとって結核の治療は容易ではありません。現タイ政府は、健康保険制度の下、タイの国民証を持つ全ての人に無料で結核の検査や治療のサービスを提供しています。これによって貧困層の負担は大幅に軽減されているものの、結核に罹り仕事が続けられなくなった場合、貧困層の患者は通院や生活のために周囲から借金をせざるを得なくなることがあります。また、国民証を持たない移民は、治療費の補助を受けられないばかりか、不法移民で捕まることを恐れ

て重篤化するまで病院に出向かないといった問題を抱えています。さらに、結核に対する差別や偏見が根強いコミュニティに属していると、周囲との関係が悪化する場合や、結核に罹患したことを知られるのを恐れて周囲との関係が希薄になる場合があります。特に貧困層の高齢患者は、周囲からの孤立感を紛らわすために飲酒に走ってしまう場合が多くあります。

このような貧困や差別は、治療開始を遅らせるだけでなく、治療期間が長い結核治療を完了させることができない原因となっていることがこれまでの研究で分かってきました。こうした問題を解消するため、配属先財団では結核研究のほかに少数民族や移民を含む貧困層の結核患者に対する慈善事業を行っています。

毎週月曜日と水曜日にチェンライ県の病院での結核診療で、診療を受けに来た貧困層の患者に対して、生活状況に応じて交通費や生活費を支給します。その際、患者に金銭面での悩みや周囲との関係などの詳しい生活事情を聞き、回答に応じた額を支給しています。結核になって家から追い出されてしまった人、元々身寄りがなくお寺の中に住んでいる人など、生活背景も様々です。チェンライ県内の、特に郊外や山間部は公共交通機関があまり発達しておらず、自家用車がない場合には、山奥の村から市内の病院に通うために1日車を貸し切らなければならないことも多いのです。中には聞き取りの途中で泣き出してしまう患者もおり、話しながら彼らの孤立感や結核という病気への不安などを強く感じることもしばしばあります。これはお金だけでは解決できない問題でしょう。

### 女性ボランティアグループの活動

また、配属先財団では「結核と闘う女性ボランティアグループ（以下VLATB）」を組織し、有志の女性ボランティアで月に1回、特に貧しい患者や、問題を抱える患者の訪問を行っています。VLATBの主な活動は三つ。①結核診療時に貧困層の患者に支給する交通費・生活費の資金集め、②結核の治療薬の袋詰め、

### ③結核患者の家庭訪問です。

メンバーの多くはチェンライ県の出身者で、社会的・経済的地位の高い富裕層の女性たちで作られたグループです。平均年齢は60歳以上で、80歳を超えるメンバーもいます。結核に対する活動だけではなく、そのほか様々な活動も行っている活発な女性たちです。

2009年から2017年12月までに、362人のタイ人、190人の山岳民族、53人のミャンマー・ラオス移民に援助をしてきました。こうした富裕層の女性たちが貧困層の結核患者の家を訪問することは、患者を励ますことはもちろん、周囲の偏見を減らすことにも役立ちます。結核とエイズを併発してコミュニティから孤立していた女性患者を温かく抱きしめたり、車で行けない険しい山道の向こうに住む山岳民族の患者を歩いて訪問したりという彼女たちの活動は、これまでも多くの結核患者を勇気づけてきました。80歳を超えるメンバーが長い坂道を越えて患者を訪問する姿には私自身も感銘を受けました。女性ボランティアは患者の訪問以外にも結核治療薬の配布準備や、患者に支給する交通費や生活費の資金集め等も行っています。

しかし支援活動に関する情報は主に知り合いを通じて伝えられていくので、メンバーと世代が異なる若い層には活動の輪が広がりません。今後もより多くの人々の結核に対する偏見を是正し、この活動を継続するには、もっと若い層にもこの支援活動を広げる必要があります。この問題を解決できそうなのが、VLATBメンバーとチェンライ市内の学生との患者訪問です。

### チェンライ技術高等専門学校の学生さんの協力

2017年の8月に初めてチェンライ技術高等専門学校（以下CTC）の学生たちと患者訪問を行いました。きっかけは、6月に訪問した患者の家で雨漏りが見つかり、それを何とかして修理したいということから配属先財団が外国人交流クラブの学生や教員に修理を依頼したことでした。学生たちは力を合わせて患者の家を修繕し、雨漏りの予防のため家の周囲にネットを張り巡らせ、ドアがなかったトイレにはドアを設置しました。普段はこれだけ多くの人がかかることはないであろう家に約15名の学生や教員と、2名の女性ボランテ

ィアが訪問し、さらに患者の家の近所の人々も手伝いに来てくれました。

CTCの担当教員は「学生にとっても教員にとっても良い機会。今後も継続的に訪問を行いたい」と話し、今後の訪問活動にも非常に意欲的です。担当教員自身、結核という病気に非常にネガティブなイメージがあったものの、結核患者と直接話すことでイメージが変わり、訪問後には友人とも活動や結核のことについて話したそうです。結核に対する偏見で苦しむ患者が多い中、CTCの学生のように若い時期に結核に関する理解を深められる機会があれば、結核患者に対する偏見も少しずつ減少していくでしょう。学生たちが社会に出て、結核患者と接することがあれば、彼らの理解者になれるかもしれません。そして結核のことを周囲の人々に伝える役割も果たしてくれるでしょう。時間はかかりますが、草の根レベルで意識を変えていくことは重要です。

### 隊員としての役割

CTCの学生とVLATBのメンバーが互いの強みを活かして協力できれば、慈善活動がより活発になることが期待できます。私はここに配属されて多くの貧困層患者と直接話し、タイにおける結核への偏見の強さや国内格差を強く感じ、ここで隊員として何ができるのだろうと悩みながら活動をしています。一協力隊員の私にできることは非常に限られており微力ですが、女性ボランティア、学生、そして配属先財団のメンバーの橋渡しとなり、今後の継続的な慈善活動のための基盤を作ることが役割だと感じています。☺



女性ボランティアグループやチェンライ技術高等専門学校の皆さん  
(前列左から2人目 白ボロシャツ着用が筆者)